

母の七回忌

大津 隆文

去る七月一日、母の七回忌を行なった。僧侶も呼ばない簡素な形で、長男である私達夫婦を中心に、私の兄弟とその配偶者、孫の九名でお参りをした。場所は新宿の「聖陵」なる室内墓、炎天下でなく助かった。

お経を三本上げたが、今回はとくに「修証義」という長いお経を皆で全文読み上げた。これは曹洞宗を開いた道元禅師の「正法眼蔵」のエッセンスらしい。お経とは故人の冥福を祈るものと思っていたが、実際は今生の私達がいかにして悟りを開くかを教えてくれている。印象に残ったのは、人は菩提心を持つことが重要で、具体的には布施、愛語、利他、同事を心掛けるべきとの教え。この中で実行しやすいのは愛語だと思った。要は慈愛の心で言葉を発するということらしい。

しかし吾が来し方は後悔ばかりだ。家の外では低姿勢で言葉使いも注意していたが、家の中では抑圧的で厳しく、妻子に優しい言葉や褒め言葉をかけたことがない。私の母は晩年認知症が進んだが、最後まで周りの人にいつも「ありがとう、感謝感謝」との言葉を忘れなかった。遅まきながら見習わねばと思う。

仏事が終わった後は食事会。話題の中心は今年二月に夫と死別した上の妹の今後の生活。有料老人ホームへの入居を考えているようだが、色々タイプがあつて考えが揺れている。私も知人が入っているホーム二カ所を紹介、同行したが、設備は大変よく整っている反面、入居に当たつての費用が約五千万円と高額だ。

「立派な大浴場やプールを本当に毎日利用するのか」「まだ一人暮らしが出来るのだから、当分はマンションやアパートでもいいのではないか」。親身に心配している皆からは忌憚のない意見が次々と出される。取りあえずはもつとあれこれ見て回ることになる。自分もそろそろ準備しなければ。

食事会では母の写真も飾ったが、七回忌ともなると母はさておき自分達の話に夢中だった。次は十三回忌になるが、多分今回が最後ね、と別れたことであつた。